

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：15501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770223

研究課題名（和文）儒教的理想主義者・元田永孚の基礎的研究を通じた明治維新史像の再構築

研究課題名（英文）Reorganization of the History of Meiji Restoration: through the basic research of Motoda Nagazane, an Idealist of Confucianism

研究代表者

池田 勇太 (Ikeda, Yuta)

山口大学・人文学部・准教授

研究者番号：30647714

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、明治維新と儒教思想との関りを具体的に検討するものとして、儒者の元田永孚を取り上げ研究を行った。元田永孚に関する基礎的な史料の収集を進めるとともに、特に幕末における攘夷論から開国論への転換がいかなる思想的変化のなかで行われたかを明らかにし、また「教育勅語」の起草にも携わった元田永孚の「国体」思想がどのように形成されたのかを中心に研究を進め、広く近代日本における儒教についても考察を及ぼした。

研究成果の概要（英文）：In this research, I focused on Motoda Nagazane who was an idealist of Confucianism, to consider the relationship between the Meiji Restoration and the Confucianism concretely. First, I collected basic historical materials relating to Motoda Nagazane. Next, I studied on his ideological transformation from expelling the barbarians to opening the country in the later Tokugawa Era, and on the formation of his Kokutai-shisou (国体思想, Tenno(天皇) ideology). I lastly examined the place of Confucianism in Modern Japan.

研究分野：史学・日本史・近現代史

キーワード：儒教 明治維新 元田永孚 国体論 攘夷論 開国論

1. 研究開始当初の背景

本研究を開始した時期においては、思想史研究において、儒学思想が明治維新といかに関わったかということが注目されつつあった。渡辺浩氏は、明治維新について、徳川時代を通じた儒学の影響力拡大の結果と論じ、宮嶋博史氏は近世東アジア史のなかで「儒教的近代」の周縁に位置していた徳川日本が朱子学モデルの国家体制を導入する契機として明治維新を位置づける仕事を発表していた。ただしこれらの研究は従来の政治史を中心とした維新史研究と乖離しており、具体的な明治維新の過程において儒学思想がいかに関わったかという点については、士大夫的政治文化と明治維新との関係を論じた朴薫氏の研究や、拙著『維新変革と儒教的理想主義』(山川出版社、2013年)を除けば、甚だ研究が少なかったと言える。

本研究で取り上げた元田永孚に関する研究については、これまで伝記叙述のほか、主として教育史・思想史・政治史の方面から研究が進められてきていた。教育史では海後宗臣氏による教育勅語成立史研究や、教育思想を中心とした伝記的研究が基礎となっていた。思想史研究では特に横井小楠の思想研究と関係した研究が多くなされていた。政治史研究では明治立憲制の形成過程に注目がなされ、天皇親政運動や宮中保守派としての元田の活躍が研究されてきた。また、元田永孚に関する一連の研究を進めてきた沼田哲氏の研究が『元田永孚と明治国家』(吉川弘文館、2005年)として刊行されていたが、いまだ史料の深い検討に進まず、課題が残されていたと言える。

2. 研究の目的

本研究は、熊本藩士で維新変革に関わり、明治天皇の侍講となって「教育勅語」の作成にも関与した元田永孚の研究を通じて、具体的な明治維新史の過程のなかに儒学思想の関りを見ていこうとするものであった。本研究では、元田永孚の活躍した天保期から明治20年代に至る時間幅のなかで、特に力点を置いて検討する時期として、従来研究が手薄であった幕末期を課題とした。テーマは、A 天保～弘化期の藩政改革、B 安政期における対外観の変化、C 安政～慶応期における政治と熊本実学党、D 国体論の形成、における元田永孚の思想と行動について、原史料を収集し、検討を行うこととした。

元田は天保期において横井小楠らと熊本藩士の間朱子学研究サークルを興し、朱子学の実践に努めるものの、藩内では彼らの学風を「実学」と呼んで排斥した。この実学グループは水戸学とも学風が近く、嘉永期に対外問題が発生する頃には熊本藩における志士活動の拠点の一つとなっていた。Aは、維新変革を推進した人々が、そもそもその初発においていかなる変革思想を有していたかを、儒学思想との関連のうちに考察すること

を想定した課題設定である。

Bは、対外思想に関するものである。熊本実学党は、もともと水戸学に近い学風を持っていたため、尊王攘夷思想を強く抱いていた。こうした攘夷思想から安政期には開国論へと変化するのであるが、それがどのようになされたかということについては、横井小楠の転向をめぐる研究を中心に長い蓄積がある。しかし、横井と近い関係を持っていた元田永孚や熊本実学党がどのようにして転向をしたのかということについては、いまだ研究が進んでいなかった。

Cは儒教的な理想主義を懐く熊本実学党が具体的にいかなるかたちで幕末政局にコミットしていったのかを検討することを意図しており、元田の動向について明らかにしていくものだった。

Dは明治期に顕著となる元田の国体論がどのような学問的展開を辿って形成されてきたかを考察するものである。幕末期から既にその姿が見られるが、これまでは十分に検討がなされてこなかった。

以上の研究に加えて、以下の方法で述べる基礎的な研究、即ち関連する史料の収集と読解を本研究の目的とした。

3. 研究の方法

元田永孚とその周辺および明治維新史に関する史料の収集を行い、研究文献を読み、これらの調査・検討を行って学会等における研究発表、論文化を実施する方法を予定した。

- ・史料の収集とその読解および翻刻
- ・研究文献の収集とその勉強
- ・研究会・学会等への参加と報告・意見交換以上がその主たる研究方法である。

元田永孚に係る史料としては、国立国会図書館憲政資料室に収蔵されている「元田永孚関係文書」が基本となるが、元田に関する史料はこの他にもいくつかの史料所蔵機関に存在し、また、実学党や元田周辺の人物の史料も収集する必要がある。本研究では史料の収集に軸をおきつつ、研究の進展に応じてA～Dのテーマに沿って論文化を進めていくことを予定していた。

4. 研究成果

まず、基礎的な史料収集と文献調査について、宮内公文書館・国立国会図書館・熊本県立図書館・熊本市歴史文書資料室・熊本大学附属図書館等において、元田永孚に関する史料の収集を行った。

元田永孚本人の史料については、国立国会図書館憲政資料室に所蔵されている「元田永孚関係文書」のうち、幕末期の史料を中心に複写し、熊本大学附属図書館が所蔵する「米田家文書」中にある元田永孚の意見書等を撮影した。これにより、幕末期の元田永孚の自筆史料については、総てではないものの、詩文や書翰を除き主要なものを集め得たと考える。明治期のもものでは、宮内公文書館が所

蔵する佐々木高行の史料を調査し、書翰が多く見出された。検討した結果、これらは既に刊行されている『保古飛呂比』に多く収録されている史料であることがわかった。ただし、『保古飛呂比』に載録されていない書翰も数通あり、かつ同じ書翰でも翻刻にかなりの相違が見られることから、今後は参照されるべき史料であることが判明した。

元田永孚の周辺史料について、熊本実学党関係では、東京大学人文社会系研究科日本史学研究室が所蔵する「小河一敏文書」の撮影調査を行い、現在は史料の解読中である。「小河一敏文書」中には荻昌国の書簡が複数点含まれている。また東京大学史料編纂所にて熊本実学党の長岡監物・荻昌国の書簡を筆写し、熊本大学附属図書館にて横井小楠文書の一部を撮影したほか、熊本県立図書館が所蔵する長岡監物・荻昌国の史料を閲覧・複写した。

実学党以外の史料では、明治期に元田と親しかった政治家の宮島誠一郎の日記の一部を、国立国会図書館憲政資料室において複写した。また幕末維新期の熊本藩政に関する史料を、中村恕齋日録を中心に調査・複写した。

これらのうち元田に関する史料の所在や研究史については文章にまとめ、学術雑誌『日本歴史』に投稿したが、現在のところ掲載されていない。発表されれば、今後の元田永孚研究において基本情報として活用されることとなるだろう。

研究目的のうちAについては史料収集段階であり、今後の課題となる。もっとも、既に元田永孚の史料については検討を進めているほか、長岡監物に関する史料も収集を行って解読中である。藩政史料については今後さらに収集を必要とするが、実学党の運動についての考察を遠からずまとめ得ると考える。

Bについては、29年3月に山口大学人文学部異文化交流研究施設発行の『異文化研究』11号に「元田永孚における開国論への転換」を掲載した。これは従来開国論者と見られてきた元田永孚が攘夷論から開国論に転換した過程を明らかにするとともに、同じ熊本実学党の横井小楠における攘夷論から開国論への転換と、その論理においていかなる異同があったかを論じたものである。ここでは嘉永期の攘夷論が宋学の影響を強く受けており、横井小楠や元田永孚がその思索を通じて儒教的理想主義を発揮しつつ宋学的発想を乗り越え、開国論を展開する姿を明らかにした。

また、Dに関係する研究では、28年9月に日本史研究会例会において、「元田永孚の西洋観と国家像」と題して報告を行った。これは儒教と明治維新をテーマにした研究会での報告であり、幕末における元田永孚の開国論を西洋観や国体論と関連させて報告したものである。特に西洋に対する思想に焦点を当て、明治政府のもとで国体思想と結びついた儒教が力を得るに至った背景を考察した。

また元田永孚が徳川幕府を覇府と位置づけ、天皇家による統治とは異なり一代ごとにその徳に応じて治める秩序として考えていたことを明らかにしたことで、熊本実学党の国体論が明瞭になってきたと言える。これは従来の元田永孚および横井小楠の天皇制に対する思想に不明瞭な点が残ってきたのに対し、史料に基づき明確な解答を得られたものと言える。

儒教と明治維新に関する全体的な考察としては、雑誌『歴史と地理 日本史の研究』252号に、「明治国家と儒教」という論考を掲載した。この論考では元田永孚の国体論や「教育勅語」の位置について考察を行っただけでなく、明治維新・明治国家形成過程と儒教との関係を昭和期まで俯瞰しつつ論じ、日本近代と儒教との関係について考察を行った。

Cに関しては論文等での発表はなく、収集した史料の解読を進めている段階であり、今後の課題として残された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

池田勇太「元田永孚における開国論への転換」(『異文化研究』11号、山口大学人文学部異文化交流研究施設、2017年3月、pp.54-67)、査読なし

池田勇太「明治国家と儒教」(『歴史と地理 日本史の研究』252、山川出版社、2016年3月、pp.31-40)、査読なし

〔学会発表〕(計 1 件)

池田勇太「元田永孚の西洋観と国家像」(日本史研究会2016年9月例会、2016年9月18日、機関誌会館(京都府京都市))

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

池田 勇太 (IKEDA, Yuta)
山口大学・人文学部・准教授
研究者番号：30647714

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()